考古遺産の調査・公開・活用に関する実践的研究

坂井　秀弥*・小林　青樹*

A Study of Survey, Publication, and Utilization in Archaeological Heritage

Hideya SAKAI and Seiji KOBAYASHI

要　旨

本研究は、考古遺産、すなわち遺跡の発掘調査、研究活動、研究成果の還元などを通して、遺跡の所在する市民にその公開と活用をはかるという「パブリック・アーキオロジー」の手法を参考に、実際に本学の教員・学生・大学院生によって考古遺産である栃木県栃木市中根八幡遺跡において調査・公開・活用が一体となった取り組みをケース・スタディーとして実践するものである。現在までに各地の大学の考古学講座が主体となったこうした体系的な取り組みの実践例は数少なく、本研究の実施が重要なケース・スタディーとなると考える。今回は、実践例として、中根八幡遺跡の調査を通じて、市民シニア向けと小中学生向けに分けて、ミニ・セミナーと現地会解説ツアーを実施した。

【キーワード】考古遺産、パブリック・アーキオロジー、中根八幡遺跡

Ⅰ．研究の構想と趣旨

日本の考古学は、遺跡、発掘調査、研究活動、研究成果の還元などを通して、多種多様なかたちで現代社会と関わっている。年間 8,000 件に及ぶ発掘調査の実施による膨大な発見とその後の調査・研究成果を、多くの人々に伝えるには、多角的な視野による分析・研究とその有機的な連携が不可欠である。特に、近年はバブル経済崩壊後、開発事業の慢性的な停滞を受け、埋蔵文化財の発掘調査も件数が大幅に減少し、それに伴って全国の考古学関連機関では事業内容の見直しが急務となった。その結果、全国の考古学関連機関では、普及活動に力をいれるようになった。それは、常日頃行っている発掘調査の内容を、市民に平易にわかりやすく理解してもらうためのものであった。毎週のように、土日の休日はこうした普及活動が実施されるのが通常の業務となり、様々なイベントが実施されている。そうしたイベントは、学芸員などが講演や講座形式で地域の考古遺産についての研究発表をするものが中心となり、その他に土器作りや勾玉つくり、土器のようなクッキーを焼いて食するもののようなワークショップ形式のものがほとんどである。

こうした状況にあって、日本の考古学遺産をめぐってどのような問題があり、そして、どのような問題解決をはかっていけばよいかが重要となっている。

平成 29 年 9 月 13 日受理　*文学部文化財学科　教授

この分野の優れた先行研究には、田中琢による指摘があり、ここでは、遺跡の保護、学校教育、ジャーナリズムなど、日本考古学と現代社会との特徴的な接点を抽出し、日本考古学の特質、課題を明確に描き出した[1)]。その後、文化遺産論の分野では、現代社会における文化遺産の諸課題を浮き彫りにする研究も行われ[2)]、また、遺跡の多角的な研究の推進を目指して2003年に設立された日本遺跡学会では、これまで多くの研究が報告されている[3)]。しかし、こうした研究は少なく、遺跡のハードとしての側面である整備や活用事例に比重が置かれる傾向がある。

一方、国外に目を向けると現代社会における考古学のあり方を研究対象とする「パブリック・アーキオロジー」が英米圏を中心に近年大きく発展した。「考古学と現代社会」に関する研究は今や汎世界的な潮流となっていると言える。こうしたなか、我々、大学で考古学、文化遺産、文化財を教育・研究する側でも、以上のような動向を注視しなければならない。

こうした研究の潮流の中で、本学では長年にわたる文化財、なかでも考古学の教育活動が精力的に実施され、全国に多くの関係者を輩出してきた。しかし、本学だけでなく日本の大学では上述のようなパブリック・アーキオロジー的な考えに基づいた教育と実践はまだ一部で始まったばかりである。しかし、現在、多くの埋蔵文化財や博物館関係では成果の公開などの普及活動が頻繁に実施されており、学生と大学院生に対するパブリック・アーキオロジー的な考え方と実践方法を学ぶことができるような人材養成の体制作りが急務となっている。

本論は、文化財学科の考古学研究室で進めている栃木県栃木市中根八幡遺跡における事例をもとに、考古遺産である遺跡の発掘調査にあたって調査と一体となった遺跡の調査成果の公開と活用というパブリック・アーキオロジー的な現代社会に貢献しうる研究を実践するものである。

実施にあたり、近年、全国各地の文化財系行政機関などで盛んに実施されている「遺跡見学」に注目し、これまでの実践例を参考に効果的と考えられるプログラムを策定する。それを具体的に調査中の遺跡で実践し、課題を抽出することを狙いとする。

Ⅱ．研究の方法と中根八幡遺跡の概要

(1) 研究の方法

本論で実施した研究は以下の2つの点に集約される。

①遺跡調査成果の活用・公開（パブリック・アーキオロジー）プログラム

学生と大学院生を対象に、パブリック・アーキオロジー的方法についての研究会を開催し、また今回の研究を進める上で参考となる取り組みを行っている、大阪文化財研究所が実施するパブリック・アーキオロジー的取り組みの実践例を見学し実践のための準備をはかる。

②遺跡の発掘調査プログラム

小林が実施する栃木県栃木市中根八幡遺跡の発掘調査において、調査・公開・活用の実践として多世代に対応した取り組み（ミニ・セミナーや解説ツアー）と、実施結果の改善のためのアンケート調査などを教員・学生・大学院生が共同して実施し後日報告する。

こうした取り組みを実施する際に重要な点は、上記2つのプログラムである発掘調査とパブリック・アーキオロジー的取り組みが相互に柔軟に連携をはかることである。

(2) 中根八幡遺跡の概要と調査日程

数千年に及ぶ狩猟採集社会から新たな農耕社会へと移行するにあたり、日本列島の各所において様々な変化が知られてきた。このうち、関東平野を横断する利根川を境として、北側では弥生時代前期には水田稲作を行わず、居住痕跡も乏しい一方、再葬墓に代表される精神文化に関わる遺構・遺物が目立っている。

この地域では、安行 3 d 式を最後として、晩期後葉には中部地方を中心とした浮線網状文土器と、東北地方の亀ヶ岡式土器の分布圏に入ることとなり、それまでの独自性を大きく変容させる。近年の研究により、この時期にはアワ・ヒエなどの雑穀栽培が東日本にも導入されることがわかっている。

こうした一大変革期の直前まで、東関東を中心とした集落において特徴的に構築・利用されたのが「環状盛土遺構」である。意図的な盛土行為を積極的に評価する説（小林達 1996）と、長期間の居住による結果的な累積と見る説（阿部 1996）の対立的構図が知られてきたが、その後の類似遺構のみならず集落立地や廃棄帯などを含めた調査研究の進展とともに、時期や地域によって異なる様々な状況などが指摘されてきた。栃木県南部には、環状盛土遺構研究の端緒となった寺野東遺跡が所在するものの、その後の調査研究は下総台地（佐倉市井野長割遺跡、曲輪ノ内貝塚、君津市三直貝塚など）や大宮台地（馬場小室山遺跡、雅楽谷遺跡など）が中心となってきた（堀越 1995、江原 1999、阿部 2005、佐倉市教育委員会編 2004・2015、馬場小室山遺跡研究会 2007、川島 2015 ほか）。

調査団の一人である小林はこれまで縄文時代晩期後半から弥生時代中期までの集落遺跡の調査研究を実施してきた（小林青 2004 など）。この過程で、縄文時代晩期後半段階の社会の集落は小規模かつ分散化傾向が顕著であり、そこにいたる経緯が課題として浮上してきた。また、同じく調査団の中村耕作は、儀礼用土器や墓制などから地域間関係を検討してきたが（中村 2013）、晩期前半を境とした大きな変化を整理する必要を感じていた。

こうして調査地として選んだのが栃木市藤岡町の中根八幡遺跡である。旧藤岡町には、寺野東遺跡と並ぶ県南部の代表的な後晩期遺跡である藤岡神社遺跡が所在するほか、詳細な調査記録が公表されていないものの、土偶や石剣研究で著名な後藤遺跡が知られていた。南側には、安行 3 c 式の標識遺跡として知られる群馬県板倉遺跡や、近年の環状盛土遺構の調査で注目された埼玉県長竹遺跡などが所在する。中根八幡遺跡は、後藤遺跡とともに『藤岡町史』において環状盛土遺構である可能性が指摘され、一部研究者に注目されていたものの、具体的な発掘調査は行われてこなかった。現地は畑地と宅地であるが、環状にめぐる盛土がよく遺存しており、その実態解明と遺跡保護のための基礎資料を得ることを目的に、奈良大学と國學院大學栃木短期大学の教員・学生による調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区自治会の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。

中根八幡遺跡は、栃木市南部の渡良瀬遊水地に連なる湿地に面した豊富な湧き水の上段に位置する直径約 160 m の環状盛土遺構である[4)]。環状盛土遺構は、小山市寺野東遺跡で初めて発見され、国指定史跡として保護・整備されているが、その後は埼玉県や千葉県を中心に発見がつづいている。この遺構が構築された約 4000 年前は、関東の縄文文化は洗練された加曽利 B 式・安行

式とよばれる土器、山形土偶やミミズク土偶、精緻な透かしの入った耳飾などをもった最盛期を迎えるが、やがて約3000年前に終焉を迎え、北関東は独自の弥生文化へと変化していく。中根八幡遺跡の環状盛土遺構の始まりから終りを調べることで、この地域の大きな変化の様子を探るため、奈良大学と國學院大學栃木短期大学が共同で2015年から学術調査を行っている。遺跡の直下には豊富な湧き水があり、これに向かって開いたドーナツ状の高まりが環状盛土遺構である。一部削平されているが、3000年前の縄文人が築いた盛土の姿をよく残している。この環状盛土遺構では、中央の窪んだ平坦部で祭祀を行い、盛土側に多数の土器などの遺物を廃棄していったものと推定される。

2016年度の調査では、まず第1に昨年度に実施したA区の掘り下げを引き続き実施した。これにより、昨年度よりも盛土中部から下部の人工的な様相を把握することができた。また、A区から約40 m離れた東側の民家の裏側において、排水を貯めるために盛土の一部が壊されており、多数の遺物が散在するとともに、盛土上部から中部付近と考えられる土層が露出していた。そこで、調査団では、栃木市教育委員会と協議の上、この地点をB区として調査を実施することとした。

調査の日程の詳細は、以下の通りである。

8月25日（木）晴：國學院大學栃木短期大学の学生・教員19名が現地に入り、まずA区周辺の草刈り、Aトレンチの掘り起し、原点移動を行なった後、A 1～A 3グリッドで10㎝ずつ掘り下げていった。

8月26日（金）晴：午前中は引き続きAトレンチを掘り下げた。午後は、とちぎ子どもの未来創造大学登録講座「縄文遺跡を発掘しよう」を開催し、栃木県内の小・中学生を対象に発掘・土器洗い・拓本・創作音楽活動を行なった。

8月28日（日）晴：境内湧水池の水を抜き、2年に一度の中根地区総出での池浚いが行われた。これに合わせて、池底の様子を確認した。

9月3日（土）晴：本日より本格調査を開始した。國學院大學栃木短期大学より機材を搬入後、Aトレンチの掘り下げを継続した。また、B地点の掘削土から遺物を回収するためふるいがけを開始した。土器・錘・注口・土器の突起・耳栓・黒曜石などが採集された。

9月4日（日）晴：A区南側の林～クリ畑～B地区に測量用の杭打ちを行なった。発掘班は、Aトレンチ掘り下げ作業をした。午後に奈良大学先発隊が到着し、A区の掘削作業を引き継いだ。A 1～A 5まで10 cmごとに床面の掘り下げを行い、A 7は壁の精査のみを行った。

9月5日（月）晴：午後に奈良大学後発隊と合流し、A 1～A 5の北壁の精査を行った。A 7は西・南・北壁の精査行った後、西壁のみに若干の拡張をいれた。短大チームはB区掘削土のふるい作業をした。午後は、B区のポンプでの排水作業を開始した。

9月6日（火）晴：A区は、A 1～A 5は、南壁を精査した後、A 2～A 5のみ掘削作業を行った。掘削土を5 mmメッシュの篩にかけた結果、貝玉や動物の骨などが検出された。A 7は、西壁のみ精査を行った。床面から炭化物が混ざる層が出現する。B区は、掘削土のふるい作業とともに、深堀区の壁面精査を開始した。

9月7日（水）晴：A区は、新たにA 6を1.4 m地点まで掘削を行った。これと同時にA 1～

A 5、A 7 の床面の掘り下げをした。床面から炭化物が混ざる層が出現する。B 区は、深堀区の掘り下げ開始した。Ba 1～Ba 4 グリッドを設定し、本日より両大学の学生を一部交代しながら 10㎝ずつ下げていった。測量班は昨年度同様、平板を用いて等高線を引く作業を開始した。

9 月 8 日（木）雨→曇→大雨→晴：坂井秀弥教授が指導のために来跡された。作業開始一時間ほどで大雨となったので公民館内で土器を洗浄した。午後は雨が弱くなって晴れ間も見えたが、下野市立しもつけ風土記の丘資料館、栃木県埋蔵文化財センター、寺野東遺跡を見学した。

9 月 9 日（金）晴：A 地点は、A 1 は 1.6 m、A 2～A 4 は 1.3 m、A 5～A 6 は 1.5 m まで掘り下げてで掘削を止めた。また A 7 の床面でピットを 1 基検出した。A 2 の北壁から大洞 C 2 式土器 1 点、A 4 の北壁から籠形土器が 1 点出土した。B 区は、作業続行。

9 月 10 日（土）晴：A 区は、午前に写真撮影を行い、午後から子供向けイベント「レッツゴージョウモン」を行った。A 7 で新たにピットを 1 基確認した。B 区は、土層断面図の作図にとりかかった。午後より栃木県史跡整備市町村協議会の担当者研修会が開催された。

9 月 11 日（日）晴：午前中より、地元の方々、研究者が見学に訪れた。A 区は、午前中に炭化物の採取を行った後、道具類の片付けをした。午後には現地説明会を行い、70 名以上が参加した。その後、両トレンチで、調査区を埋戻し機材を短大に撤収した。

9 月 12 日（月）晴：午前中に奈良大学へ搬出する遺物の選別の遺物と宿舎の片付けを行い、解散した。

なお、本調査に参加したメンバーは以下の通りである。

坂井秀弥（教授）、小林青樹（教授）、岩永祐貴（大学院修士 1 年）、萱原朋奈、木ノ内瞭、新里遥（学部 4 年）、郷原麻鈴、榊原夏菜、中島愛理（学部 3 年）、粟野翔太、桐部夏帆、杉浦正和、松岡奏、三宅良宣（学部 2 年）、石川智規、上野あさひ、草木柚乃、佐々木仁志（学部 1 年）。

Ⅲ．事前準備

本取り組みを実施するにあたり、事前にパブリック・アーケオロジーに関する検討会を実施した。パブリック・アーケオロジーの研究は、有効と考えられる実践例の積み重ねが重要であり、今回は、そうした取り組みの実践において先進的な機関を選定し、研究と実践方法についての検討を行ったわけである。

8 月 3 日、大阪市文化財協会において、パブリック・アーケオロジーを研究している岡村勝行氏にレクチャーを受け、本研究実施にあたっての指針を得た。この日は、大阪市文化財協会が実施する発掘調査現場（国立病院機構大阪医療センター敷地内）を見学し、主に前期難波宮跡と江戸期の武家屋敷跡、戦時中の防空壕跡を見学し、現地でパブリック・アーケオロジーの実践方法を検討した。そして、大阪歴史博物館において、ボランティアスタッフによる案内説明を受け、岡村氏から大阪歴史博物館でのパブリック・アーケオロジーの取り組みについて説明を受けた（写真 1）。このように岡村氏とボランティアガイドからパブリック・アーケオロジーの方法論及

写真 1　大阪歴史博物館における遺跡博物館の説明

写真 2　調査風景

び実践論についての話を伺い、中根八幡遺跡での実践に対する課題を明確にした。

また、発掘調査を実施する前に、調査に参加する教員と学生でパブリック・アーケオロジーに関する研究会を実施した。これまでのパブリック・アーケオロジーの実践例[5]からみて、本研究では、まず市民シニア向けとして、現地説明ツアー（調査全期間実施し、現地調査最終日に栃木市と連携した現地説明会を実施する）と遺跡に隣接する公民館において現地調査最終日に縄文衣装と出土遺物の見学会を実施し、小中学生向けに夏休み子供向けプログラム 2016「レッツゴー　ジョーモン！」を実施する計画を立案した。そして、当日は参加者のアンケートを実施し、さらに実施後に実施側であった学生の考えについても集約することにした。

Ⅳ. 取り組みの概要

まず市民シニア向けの現地見学ツアーは、調査全期間実施し、遺跡周辺に居住する市民の方々に遺跡の重要性と歴史について説明を行った。調査中には、毎日、見学ツアーに参加する地元住民の方々がおり、日々変化する現場の状況に関心を持たれたようであった（写真 7）。

そして、あわせて縄文衣装と出土遺物の見学会を実施した（写真 8）。遺跡に隣接する公民館を利用し、2016 年 9 月 10 日（土）12 時より実施した。衣装には、2 名の学生を配置し、参加者に対応した。

次に、子供向けプログラム 2016「レッツゴー　ジョーモン！」は、2016 年 9 月 10 日（土）12 時より実施し、参加人数は 7 人であった（写真 3〜6）。

写真 7　シニア市民向け現地

写真 8　縄文衣装の着衣

写真 3　クイズ 1 の場面

写真 4　クイズ 3 の場面

写真 5　クイズ 4 の場面

写真 6　クイズ 6 の場面

この取り組みは、パブリック・アーケオロジーの一環として、発掘現場と神社の敷地を利用した縄文クイズラリーとして実施した。パネルを使った縄文人の生活に関する問題を計 7 問（耳飾り、食べ物、家、石、土器、石器、動物について）用意し、各問 1～2 人が担当者となって出題と解説を行った。方法は簡単で、アンケートも兼ねた解答用紙を参加者に渡し、各ポイントを巡ってもらうものである。問題によっては、実際に遺跡から出土した骨や土器等の遺物を解説時に見てもらうことにした。クイズの対象年齢を小学校低学年と想定して作成したが、実際には、当日は大人の参加もあり年齢に合わせた解説を各自心がけることとなった。

クイズの内容は、以下の通りである。

①クイズ

Q 1：じょうもんイヤリングはどれ？

Q 2：じょうもん人が好きな食べ物は？

Q 3：じょうもん人の家はどれ？

Q 4：じょうもん人はこの石で何をした？

Q 5：じょうもん人が使っていた器はどれ？

Q 6：この光る石は何？

Q 7：じょうもん人のペットはどれ？

②解答

Q 1：①ジョウモン人は、耳にあなをあけてミミカザリをはめていました。ホンモノのミミカザ

リをさわってみましょう。
Q 2：③ジョウモン人は、イノシシをよくたべていました。ホンモノの骨（ほね）をさわってみましょう。
Q 3：①ジョウモン人の家（いえ）は、じめんに穴（あな）をほり、上にヤネかけていました。
Q 4：②ジョウモン人は、このイシでドングリをつぶして料理（りょうり）しました。
Q 5：②ジョウモン土器（どき）は、粘土（ねんど）をやいてつくりました。シチューなどをにました。ホンモノのドキをさわってみましょう。
Q 6：③ガラスのような石（いし）はコクヨウセキといいます。イノシシをつかまえるときの矢じり（やじり）にしました。ホンモノの矢じり（やじり）をさわってみましょう。
Q 7：①ジョウモンじだいには、イヌをかっていました。今の柴犬（しばいぬ）にちかいイヌでした。

また、当日行ったこの取り組みについてのアンケートと、集計結果は以下の通りである。

アンケート
Q 1：いちばんたのしい問題（もんだい）は、どれでしたか？
1 みみかざり　2 たべもの　3 いえ　4 いし　5 どき
6 ひかるいし　7 いぬ
Q 2：おにいさん、おねえさんの説明（せつめい）は、わかりましたか？
1 わかった　2 なんとなくわかった　3 わからない
Q 3：問題（もんだい）はむずかしかったですか？
1 むずかしい　2 ややむずかしい　3 むずかしくない
Q 4：またやってみたいですか？
1 やってみたい　2 わからない　3 やりたくない

③アンケート集計結果
Q 1：2　たべもの（3）　3　いえ（3）　6　ひかるいし（1）
Q 2：1　わかった（7）
Q 3：2　ややむずかしい（4）　3　むずかしくない（3）
Q 4：1　やってみたい（7）

クイズは、全部で 7 問設定し、子供向けの平易な問題を設定した。こうした取り組みについてのアンケート集計結果では、「わかった」という回答が参加者全員である 7 名、「ややむずかしい」という回答が 4 名、「むずかしくない」という回答が 3 名、「またやってみたい」という回答は参加者前方部である 7 名であった。

以上の集計結果のように、アンケートにおける評価は上々であったが、問題がやや難しいという指摘が半数以上であった。事前の検討では、どれだけ平易に作成できるかが問題であったが、この点を今後改善点とすべきであろう。

Ⅴ．今後の課題

今回実施した本研究は、現代社会における考古学のあり方を研究対象とする「パブリック・アーキオロジー」であり、この研究の方法を考え、そしてそれを実践することが目的であった。子供向けのイベントの実施については、現在は全国各地の文化財関係行政機関において実施されている。今回、実施にあたって留意したのは、参加者の意識と実施側の意識がどのようなものであるかを考えることである。今回、子供向けイベントで最大の問題となったのは、子供の発達段階に応じた取り組みを心がけなければならない、ということがより明確になったことである。今回の取り組みでは、小学校低学年までを対象としており、基本的に考古学や遺跡などの知識は全くない。アンケートでも、説明が難しいという回答がいくつかあった。

こうした状況のなか、世代や年齢を越えてまず現地ですべきことは、いかに遺跡の楽しさを伝えるかであろう。アンケート結果では、そうした楽しさを感じた子供たちが少なからずいたことは、今回の取り組みがある意味成功したといってもよいかもしれない。いずれにしても、今後、子供向けのイベントを実施する際には、初等教育学や発達心理学などの分野と共同して年齢に応じたプログラムの策定を行うべきであろう。

また、シニア世代への取り組みとして毎日現地見学ツアーを実施した点については、最終的に実施した現地説明会において多数の来場者を得たことに繋がったと考える。毎日、現場に足を運ぶ見学者に対し、日々変化する現場の状況をリアルタイムで説明することは、遺跡の発掘現場においては必要なことであろう。また、子供向けイベントの実施と合わせて、異なる世代にアプローチを試みた点が有効であったことは、取り組みを実施した学生の意識の変化に現れている。調査実施中の観察では、多くの学生が目線の高さや説明方法を世代ごとに適切に変えており、見学の導線も適宜変えていた。こうした異なる世代への対応において、柔軟性は重要であり、今回異なる世代の取り組みで構成した効果が表れているであろう。

今回の取り組みで明らかとなったのは、理論や方法を考えるだけの段階だけでは、より効果的な「パブリック・アーキオロジー」の実践は難しいということである。冒頭で述べた通り、「パブリック・アーキオロジー」の研究は、実践例を積み重ね、改善をしていくことが重要である。そうした意味において、今回の取り組みは一つの実験例を提示したことになる。

謝辞

本取り組みを実施するにあたり、下記の諸氏・諸機関の指導・援助を受けた。記して謝意を表したい。

國學院大學栃木短期大学、中根地区、中根八幡神社、栃木市教育委員会、栃木県教育委員会、小山市教育委員会、下野市教育委員、中村耕作

引用参考文献

１）田中琢編 1986「現代と考古学」『岩波講座　日本考古学』第 7 巻、岩波書店
２）土生田純之編 2009『文化遺産と現代』同成社
３）中西裕見子・岡村勝行 2003「英国における文化遺産研究の理論と実践」『遺跡学研究』第 1 号、日本遺跡学会
４）中根八幡発掘学術発掘調査団 2016「栃木県栃木市中根八幡遺跡第 1 次発掘調査概要報告」『文化財学報』第 34 集、奈良大学文化財学科、中根八幡発掘学術発掘調査団 2017「栃木県栃木市中根八幡遺跡第 2 次発掘調査概要報告」『文化財学報』第 35 集、奈良大学文化財学科
５）岡村勝行・松田陽 2012『入門パブリック・アーケオロジー』同成社

Summary

In this study, we will implement these efforts of survey, publication, and utilization in archaeological heritage by Public Archaeological approach. This time, we actually practiced such efforts at Nakanehachiman site, Tochigi city, Tochigi Prefecture.

Until now, there are only a few cases where archaeological research institutes of universities in various regions have taken the initiative to practice such systematic efforts. Therefore, the implementation of our research will be an important case study. This time, as a practical example, we conducted a mini-seminar and field explanation tour for citizen senior and elementary and middle school students through survey of Nakanehachiman site.

【Key words】 archaeological heritage, Public Archaeology, Nakanehachiman site